



## 2014年 生物工学功労賞 受賞

### 受賞にあたって

アサヒグループホールディングス（株）  
代表取締役副社長 川面 克行



この度は第8回生物工学功労賞を受賞させて頂き身に余る光栄に存じております。受賞に際しご推薦、ご支援を賜りました園元謙二会長をはじめ関係各位、先生方に厚く御礼申し上げます。また、学会創立90周年記念事業の募金委員の先生方には大変お世話になり、改めて厚く御礼申し上げます。そして、小職の学会活動を支援してくれたアサヒビールの仲間にも心から感謝します。

私は1975年アサヒビール（株）に入社し、吹田工場の醸造課から会社人生がスタートしました。勤務地が大阪大学と近いこともあって、醸酵学懇話会や学生の見学対応など学会の活動に、その当時から少しは関与しておりました。このような関係から学会支部や大会運営に参加させて頂く事となり、7年間の評議委員の後、直近では2011年から3年間、本部の理事を務めさせて頂きました。なかでも90周年記念大会の募金委員長を仰せつかった時は募金目標を達成できるか否か、大いに不安ではありましたが募金委員の皆様、学会関係者の皆様、とりわけ醸金をして頂いた多くの方々から大いなるご協力を得て、無事務める事ができました。

私は入社以来、最初の25年間は工場でのビール醸造、次の10年はビールの研究開発と、ほぼビール造り一筋に歩いて参りました。その間、会社の苦境を経験し、改めてビール醸造の深さを思い知りました。ビールは嗜好品であるが故に必ず官能検査が実施される一方、精緻な化学分析も同時に行われます。しかし官能検査の結果と分析データは必ずしも一致するものでもなく、常に不可解な問題が残ります。今の時代のように分析機器の感度が向上しても埋めきれものではありません。とは言え、昔に比べればデータで説明できる醸造プロセスコントロールが可能になりビール品質の向上には目覚ましいものがあります。このように醸造を実践し、日々技術を磨いていく楽しさとは裏腹に、ここ数年は実業の現場を離れ、経営者の端くれとして異分野の仕事をしている感を否めません。

会社生活40年を過ごす今、日本の企業にとって産学の連携は今後益々活発になっていくべきだと考えております。本部の理事を担任させて頂いた時に、当時の柳副会長とともに実業界の観点から種々の意見を述べさせて

頂く機会がありました。近隣諸国の台頭、あるいはガラパゴス日本と言われるように、グローバルと言う言葉の波に日本は翻弄されています。技術立国日本としての「大学と産業界の在り方」、つまり大学と企業という関係とは別に、「学会」、すなわち、我々で言うなら日本生物工学会の産学連携に果たすべき役割は実に大きいと考えております。学会は大学単独組織とは異なり、多くの大学との連携、あるいは産業界、政府機関との連携で成り立っており、各界の広範囲な専門分野の集団であり、より広い視点での活動が期待されています。しかし一方、その経済基盤は大学と比べるときわめて脆弱であると言わざるを得ません。多くの学会は個人会員の会費で成り立っており会員数を維持できなくなれば学会の存続そのものが難しくなり廃会となっている学会も出てきています。特に記念事業を行うとなれば寄付金に頼らざるを得ません。日本の寄付文化が欧米諸国に比べれば圧倒的に低位にあるのは皆様もご存じの通りです。この問題は文化の違いと一言で片付けられるものではなく、日本の税制改定を含めた制度そのもの見直しが必要でしょう。

ここ数年日本各地で生じた災害に対する義援金による寄付が相当増えてきています。いわゆる寄付指数世界ランキングが向上しつつあります。最近の話題ではありますが「アイス・バケツ・チャレンジ」という筋萎縮性側索硬化症に対する寄付支援運動がありました。この事で色々な意見が出ていますが、こういったやり方で、ある種の問題を世間に知らしめ金銭的支援を受けるというのはあってもいいのではないかと思います。出身母校に対する寄付、誰かを助けたいという義援金、つまり寄付行為は応援したいと思っている事に対する具体的行動の一つの表現であると理解しています。応援したいという「心」を寄付という「形」で素直に表現することから始まるのではないかと思います。

次回の100周年記念事業に向かって会員各位、産業界各位の皆様には絶大なるご支援賜ることを切にお願いしたいと思っております。微力ではありますが今後とも学会発展のために貢献し続けたいと思っております。

最後になりましたが今回は過分なる賞を頂き誠にありがとうございました。